

## 使徒言行録 第11章1～18節

私たちはこれまで、2週にわたって、ペトロとコルネリウスのお話を聖書から聴いてきました。コルネリウスはユダヤ人ではありませんでしたが、神を敬い、絶えず祈りをなし、人々に施しをする信仰者でした。そのコルネリウスが幻を受けてペトロと出会います。そしてコルネリウスは異邦人であったにもかかわらず、ペトロによってバプテスマを受けます。ペトロもまた、神様から見せていただいた幻によって、異邦人に対する先入観を取り除かれていきます。そしてここから、本格的な異邦人伝道が開始されていくのです。

私たちにとって、このコルネリウスとはいったい誰なのでしょう。単純に異邦人伝道ということを考えますと、私たち日本人以外の人ということになるのでしょうか。アジアの諸国の人たち、外国の人たちが私たちにとっての異邦人になるのでしょうか。もちろん、そのような視点もたいせつになってくるのですが、しかし、このコルネリウスという人物は、実は私たちのもっと身近なところにいる人なのではないでしょうか。

コルネリウスはイタリア隊の百人隊長でした。百人隊長とは、文字通り、百人くらいの部隊の隊長です。聖書には他にも千人隊長も出てきますので、この千人隊長が大隊長なら百人隊長は中隊長といったところでしょうか。イタリア隊というローマの軍隊の組織の中での中隊長。もう少しかみ砕いていいますと、大きな組織の中に組み入れられて、その組織の中の中くらいの部門の責任をもって面倒を見ている人。いわゆる中間管理職です。この中間管理職というのはなかなかたいへんな部門で、上からは無理難題を命令され、下からは突き上げられ、その狭間に置かれてたいへん苦しい立場を経験してきた人たちです。つまりこのコルネリウスとは、私たちの社会においては、中堅の働き盛りの人たちと考えることができます。この人たちは、社会のいちばん大きな歪みの中に生きていて、自分の思い描いていた理想的な生き方や仕事に対する思いと現実のギャップにいちばん苦しむ人たちでもあります。コルネリウスもそんなことを感じていたのかもしれませんが。ですから彼は、そのような自分の立場や仕事とはまったく別な世界、信仰の世界に興味を抱き、神を敬い、祈りをなし、施しをしていたのかも知れません。私たちの周りにも、たくさん問題を抱えている人、生き方や仕事に矛盾を感じている人たちが大勢いるにもかかわらず、私たちキリスト者がそのような人たちを見つけきれずに、ただその人たちが自発的に教会に来るのをぼうっと待っているのだとしたら、これはたいへんなことです。

私たちが自分のまわりに人たちに証しをするとき、特に私たちの家族や親類の人たちに信仰の話をするときに、「ああ、どうせ、この人には神様のことはよくわからないのだから」とか、「わかろうとしない人になにを話しても無駄よね」という思いを持って、あきらめたり、話すのを止めてしまったことはないでしょうか。もしそうだとしたら、私たちの方からまずそのような思いを変える必要があります。わかろうとしないのは彼らの方ではなく、むしろ私たちの方なのではないでしょうか。自分の家族がさまざまな問題で苦しんでいるとき、悩みを抱えているときに、もしかすると、聖書と出会えば、神様と出会いさえすれば解決するかも知れない心の悩みを抱えているにもかかわらず、そのSOS信号をこちらが感じるができずに「どうせ、この人はキリスト教に何か興味ないんだから」といって切り捨ててしまっているのは、実は私たちの方なのではないでしょうか。その姿こそが、神が清めた物を清くないと言って拒み続けるペトロの姿であり、それが私たちの

姿なのです。私たちの方からまず、そのような先入観を取り除き、心開いて相手の悩みが何なのか、何を必要としているのかをじっくりと聞く必要があるのではないのでしょうか。

神様からの幻によってコルネリウスはペトロと出会い、バプテスマを受け、本物の信仰者となっていく道が開かれていきます。一方でペトロは、異邦人との間に自分の方から知らず知らずのうちに築いてしまっていた隔ての壁が打ち壊されていきます。神が清いとされた物を、清くないなどと人間が言うてはならない。この幻を神様からいただき、そしてコルネリウスとの出会いという具体的な出来事の中で、ペトロは隔ての壁を自分の方から取り除いていくのです。

この一連の出来事の中で、最初、コルネリウスはペトロに会いたいと思っていたわけではありませんでしたし、ペトロの方もコルネリウスのことはまったく知りませんでした。お互いに知らなかった者同士が神の不思議な導きの中で、それぞれに違う形で幻を与えられながら、出会いの時を与えられた。神様のなさることは実に不思議なことなのです。

しかし、この出来事が偶然ではなく必然として起こるために、この2人がそれぞれしていたことがあります。使徒言行録10章2節には、コルネリウスについて「信仰心あつく、一家そろって神を畏れ、民に多くの施しをし、絶えず神に祈っていた」と記されています。また9章の最後の段落を見てみますと、ペトロはヤッファでたいへん素晴らしい働きをした後、10章9節でペトロが神様から幻を受ける場面では、「祈るために屋上に上った」ことが記されています。コルネリウスとペトロがそれぞれ、神様から幻を受けてお互いに出会うためには、それぞれの備えの時、神を敬い、祈りをなし、施しをし、福音を宣べ伝えるそのようなときが必要だったのです。そしてもう一つ、コルネリウスもペトロもそれぞれ幻を受けたときに、それが自分の勝手な思いこみであるとは思わず、その幻に従っていった。神の招きに対して疑わずにそれに従っていったから、彼らの出会いが起こったのです。神の招きに対して、コルネリウスかペトロかそのどちらか一方でも答えることがなければ、この素晴らしい出会いの時は起こらなかったのです。

このように、コルネリウスとの出会いを通して変えられたペトロでしたが、エルサレムにいたユダヤ人キリスト者たちは、まだ古い考えに捕らわれたままで、異邦人と食事をしたペトロを非難します。これは、教会にもよく見られることです。うちの教会では昔からこうやってきましたから、とその背後にある本当の理由も知らずに、そのやり方に慣れているというだけで続けられている習慣がたくさんあります。この神戸西教会の礼拝プログラムやさまざまなやり方に関しても、見直さなければならぬところがたくさんありますが、そのときに、今日の聖書の箇所に出てくるペトロのように、理路整然と物事を語ることができるかどうか、また18節にありますように、ペトロの言葉を聞いた人々がそれを受け入れ、神を賛美したというようなことが、私たちも同じようにできるかが問われているのです。今日の聖書の箇所、4節以下でペトロは彼を非難した人たちに向かって事の次第を語り始めます。そのときのペトロの様子が次のように記しています。「そこで、ペトロは事の次第を順序正しく説明し始めた」。不当な理由でペトロを非難した人たちに対して、ペトロは怒ることもいきどおることもせず、自分がコルネリウスに遭う前に見た幻の話から始めて、順序正しく説明し始めたのです。ここに証しのたいせつな要素があります。ペトロは、自分の考えや思いではなく、彼の上に起こった出来事、そしてコルネリウスの上に起こった出来事、すなわち、実際に起こった出来事、事実だけを語ったのです。

私たちが行う証しは、事実だけを語らなければなりません。こんな幻を見た。こんな出来事が起こった。起こったことに色を付けずに、そのまま語る。それが、証しなのです。前にも話しましたように、証しとは証言です。自分が見たこと、実際に起こったことを証言するのです。私たちの思いや考えは、それと違う思いや考えを持つ人に対しては役に立たないかもしれませんが、実際に起こった事実については、それを曲げることができません。しかもペトロは、自分とコルネリウスの上に起こった出来事を、イエス様の出来事と結び付けて語っているのです。16節にはこう記されています。「そのとき、わたしは、『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは聖霊によってバプテスマを受ける』と言っておられた主の言葉を思い出しました」。ペトロとコルネリウスの上に起こった一連の出来事は、主イエス・キリストの出来事であった。そしてペトロは、17節でこう語るのです。「こうして、主イエス・キリストを信じるようになったわたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのような者が、神がそうなさるのをどうして妨げることができたでしょうか」。一連の出来事は、神がなされたのだ。だから私たちには止めることなどできないのだ。このように、起こった事実を順序正しく説明したペトロの証しを聴いた人々は、18節にありますように、【この言葉を聞いて人々は静まり、「それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ」と言って、神を賛美した】のです。ここでもう一つ大切なことは、ペトロを非難した人々が、ペトロが語った証、ペトロの上に実際に起こった事実を聴き、しかもそれが神様から来ていることを聴いたときに、静まってから神を賛美したということです。神の前に静まること。沈黙することは、神の声を聴き分けるために、とてもたいせつなことなのです。よく言われていますように、私たち人間には、口が一つしかないのに対し、耳は二つあります。ですから私たちは、話すことの2倍、聴くことをしなければなりません。新約聖書でも、ヤコブの手紙1章19節には、次のように記されています。「わたしの愛する兄弟たち、よくわきまえていなさい。だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい」。そして、神様の言葉は沈黙の中でしか聴くことができないことが、旧約聖書の列王記上19章に出てきます。450人ものバアルの預言者と対決して勝利した預言者エリヤは、アハブとイゼベルの報復を恐れて逃げていきます。洞穴の中に逃げ込んだエリヤに向かって、主なる神様は、洞穴を出て主の御前に立ちなさいと告げます。すると主の御前に、非常に激しい風が起こり、山を割き、岩を砕きましたが、風の中に主はおられませんでした。風後に激しい地震が起こりましたが、地震の中にも主はおられませんでした。地震後に炎が燃え上がりましたが、炎の中にも主はおられませんでした。その後、静かにささやく声が聞こえてきました。主の御声は、静かにささやく声なのです。ですから、御前に静まって、沈黙しなければ主の御声を聞くことはできません。サムエル記上3章でも、主なる神様がサムエルに語り掛けたとき、サムエルは「どうぞお話しください。僕は聞いております」と答えました。

今日の聖書の箇所でも、異邦人にも聖霊を送ってくださったというペトロの証しを聴いた人々は静まりました。静まってペトロが語った御言葉を聞き終わると、ペトロを非難した人々は神を賛美し始めたのです。静まって神の声を聴き、自分たちの過ちを悔い改め、神を賛美する。これが、異邦人への伝道が本格的に始まった際に起こった出来事でした。同じように、私たちも静まって神の御声を聴き、神を賛美していきたいと願います。